

氏名	李卓
学位の種類	博士(造形)
学位記番号	博第43号
学位授与日	2024年3月15日
学位授与の要件	学位規則第3条第1項第3号該当
論文題目	中国・宋～明代の印刷物における「内景図」の視覚伝達に関する研究 —『事林広記』に掲載された「内景図」を中心に—
審査委員	主査 武蔵野美術大学 教授 中野 豪雄 副査 武蔵野美術大学 教授 寺山 祐策 副査 武蔵野美術大学 教授 大田 暁雄 副査 武蔵野美術大学 教授 前田 恭二

内容の要旨

「内景図」は人体の内部の現象について記述する図式を指し、中国に古代より伝わる多領域の印刷物に掲載されてきた。「内景図」には具体的な人体の構造のみならず、五臓神や内丹、経絡などの宗教的性質の内容も含まれている。これまでの研究では「内景図」に関する研究は主に道教と中医学の両面から理論的な変遷が検討されているものの、「内景」及び「内景図」は知識として、どのように理論から図像へ徐々に視覚化されていくのか、および印刷物を通じてどのように道教の修練者や医学の従業者などの専門的な階級から非専門的な階級における文人たちに普及してきたのかという検討が十分ではない。本稿は、「内景図」の源流を遡って、印刷物における「内景図」の変遷を考察して、『事林広記』に掲載された「内景図」を中心に、版式や図像要素の変化を分析することにより、「内景図」の視覚伝達の特徴を分析し、「内景図」が専門分野から非専門分野にどのように伝播しているかを検討したものである。

まず、文献資料における「内景」の語源、及び現存する印刷物における「内景図」の変遷を探究することにより、以下の諸点を明らかにした。(1)「内景」の語源は陰陽学説から生まれ、道教分野で修練法に発展し、内景理論が徐々に視覚化されてきた。(2)「内景図」は初期の「黄庭内景五臓六腑図」図式から「煙蘿子図」に変遷した。そして、「黄帝八十一難経内境図」は「煙蘿子図」の6枚の図像を1枚の図に統合し、『事林広記』の「内景図」の図式は「黄帝八十一難経内境図」とほぼ一致している。(3)「内景図」は古代からの解剖的な形、及び内丹法などの修練方法に関する体の内なる世界を図式化したものを祖として、「内景図」は印刷文化の発展とともに、最初に道教の書物と医学の書物に掲載され、

そして「日用類書」に収録されるようになる。また、現存する「内景図」を載せた書物には、4つの版式が存在することを明確化した。

次に、現存する書物においては、「日用類書」の『事林広記』に掲載されている「内景図」は、図式が比較的古い時代からのものであるが、「内景図」は元代と明代の『事林広記』の刊行に伴い、多くの版本に掲載されるようになって、各版本に掲載されている「内景図」もそれぞれ異なる。したがって『事林広記』に掲載された「内景図」を中心に、「内景図」の紙面的特徴を探究することにより、以下の諸点を明らかにした。(1) 11部の完全な『事林広記』の版本のうち、8つの版本に「内景図」が掲載されている。(2) 『事林広記』に掲載された「内景図」の4つの典型的な版本のうち、1340年の鄭氏積誠堂刻本は最初の図版、1392年梅溪書院刻本は修正版、1418年翠巖精舎の刻本は新版、1478年劉延賓刻本は他の失われた版本に基づいて復刻された版本である。(3) 『道蔵』などの宗教の書物や医学の書物に比べ、日用類書の『事林広記』に掲載されている「内景図」は、文字表記、寸法と版式を通俗化する調整を行った。

最後に、学問、社会、造形という3つの背景から、「内景図」が道教の分野から日用の分野に発展してきた要因について検討した。印刷物に掲載された「内景図」の通俗化へ向けての変化は、当時の人々の身体への意識の変化とも考えられる。印刷物としての「内景図」を視覚伝達の視点での分析を通じて、「内景」が視覚化された理論や、印刷物における視覚的な特徴、道教や医学といった専門性の高い内容から、日用類書の非専門的な内容へと変化し、普及していった過程を考察した。本稿では、主に以下の諸点を明らかにした。(1) 印刷物に掲載されている「内景図」では、文字表記が伝える情報がより重要である。(2) 『事林広記』に掲載された「内景図」の復刻の過程で、専門的な知識を持たない制作者は類似的に元の図像を模倣した。(3) 『事林広記』に掲載されている「内景図」は、情報の可視化の性質を持ったものから、扉絵のように装飾的な性質を持ったものへと徐々に変化している。

以上のように、「内景図」における視覚伝達に関する研究を通じて、本研究が「内景図」という人体図像について探る中で、今後さらに中国伝統的な人体のイメージを分析するための基礎情報を提供することができる。中国における身体イメージ、およびその視覚化の歴史の基礎研究の一助になれば幸いである。

審査結果の要旨

論文の概要

「内景図」は古くから中国において人体の内部構造、および体内で起きる現象を記述した図像であり、主に中国伝統医学と道教思想の文脈で育まれてきたものである。本研究では「内景図」が医学や道教などの専門家から非専門的階級の人々に向けてその造形がどの

ように変化し一般化へと向かっていったかを明らかにすることを目的としている。

著者は数多くの文献資料の調査によって「内景」の語源に哲学的な意味や宗教的な意味が含まれており、その中には臓腑各部位を神に例えるなど視覚的なイメージに基づいて体内を比喩的に意味化した言葉が多くあることを確認する。そうした視覚イメージが「黄庭内景五臓六腑図」によって図像化され、「内景図」の源流となったことを明らかにした。陰陽学説から生まれた内景理論が道教分野の修練法へと発展し、その中で視覚化が徐々に行われてきたことを論じている。特に「黄庭内景五臓六腑図」から「煙蘿子図」への変遷によって、道教の修練法を表す象徴記号と、医学的な類似記号を併記した6枚の図像に変化したこと、さらには「黄帝八十一難経内境図」によってそれらの記号が1つの図像に統合され、「内景図」の図像形式が定型化されていったことは、論文後半で述べる「内景図」が印刷物を通して通俗化していく前段階の出来事として位置付けている。

論文後半では元代～明代における中国の出版状況を整理したうえで、「内景図」が印刷物を通して非専門的階級の人々へと普及していく過程を明らかにするために、「内景図」が掲載された現存する最古の印刷物である『事林広記』を分析対象とした。『事林広記』を含む「日用類書」の定義や、『事林広記』が生まれる社会的背景、『事林広記』の図像の特徴を概説したうえで、1330年～1699年の間で刊行され続けた11部の版本のうち「内景図」が掲載された『事林広記』8部、さらにそのうちの実物を確認できるもの全てを一次資料として観察し分析を行なった。版本実物の観察と分析は、各版本を原寸で重ね合わせ、図像の寸法、レイアウト、造形要素、文字要素が版本ごとにどのように異なり、それによって情報伝達にどのような影響を与えているかを詳細に論述している。

版本を重ねていく中で文字が簡体字から異体字に変化したことや、造形要素が簡略化されていったこと、図像の寸法が大きくなる代わりにレイアウトの調整が図られていったことなど、復元や模倣を繰り返す中で微細な変化を遂げていったことを明らかにしただけでなく、それによって『事林広記』の「内景図」の版本ごとの継承関係を同定していったことは本論の新知見となった。ここまでの調査・分析・仮説と実証を踏まえた上で、道教分野から始まった「内景」の視覚化が、非専門的階級の人々に向けて通俗化されていくまでの過程を、学問・社会・造形の3つの要因から結論づけている。

審査の概要

公聴会は2月17日(土)13時より本学鷹の台キャンパス9号館1階ゼロスペースで対面・オンライン併用のハイブリッドで開催された。また同会場では論文の流れに沿う形で資料と年表の展示を行い、展示資料も交えて研究発表を行なった。発表後には活発な質疑応答が行われた。

その後、提出された博士学位申請論文に対する審査委員会が、鷹の台キャンパス1号館217小会議室で開催された。

審査の結果報告

最初に予備論文で指摘された問題が修正されているかどうかの確認が行われた。用語や引用表記の統一、漢文読み下しの精度向上、比較分析の図解の改善、論文全体の流れを整理し読みやすさに留意すること、序論の位置付けの整理等の問題、内容面では図像の変化がもたらした視覚伝達の特徴についての言及が不足している点である。

以上の問題に対して、表記統一の精度は前回よりも格段に増し、論文全体の流れも細部にわたって修正を繰り返していくことで向上したことが確認された。図の扱いについては、文字表記の変遷を個々に図版を組み込んだリストにすることで、分析の詳細が具体的に示されたこと、さらに今回の論文では造形的な変化も詳細なリストとして新たに追加されたことで、図像の中の形と文字の関係自体が変化したことも記述され具体的に示されたことも確認された。また、「煙蘿子図」から「黄帝八十一難経内境図」、『事林広記』の「内景図」と変化していくなかで、継承・捨象されたことを図解を交えて解説した4章での記述は今回新たに追加されたものであり、宗教的な意味を含んだ造形が一般化に向けて図を単純化し、文字注釈に伝達の比重を高めていった過程をより詳細に論じていることが確認された。

以上を踏まえて本研究の合否が検討された。主だった意見・議論の内容を以下に記す。

まず、個々の理論の裏付けとなるリサーチは詳細で緻密であり、十分な説得力と根拠が示されているといえる。「内景図」の変遷をたどる記述のみならず、『事林広記』の版本を実地調査した意義は非常に大きい。具体的には尊経閣文庫本が元代での成立ではなく、明代中期と推定している点をはじめとして、細部の比較を通じて各版本の系譜を整理したことは学術的な意義があるといえ、本研究を価値づけるものである。また、本研究の研究手法である、実寸を重ね合わせ、その差異や相似する形に分解・整理することで、図像の継承と改変を明らかにしたことは本研究による新知見であり、高く評価できるものである。『事林広記』が版を重ねていく度に「内景図」の文字の形状そのものが改変され、言葉の意味自体にも影響を与えていく様相を浮かび上がらせることができたのも、こうした緻密な分析による成果だといえる。

予備論文ですでに成果は挙げていることだが、「内景図」は道教分野や医学分野において理論化がなされてきたが、造形的な分析によるアプローチから通俗化への変化を論じたものは数少なく、本研究の独自性として認めることができるだろう。また、道教から日用類書へと至る出版文化の変遷、その中で培われてきた、専門的な知が一般化されていく過程で生じた視覚伝達の様々な試行錯誤が明らかになったことは大きな成果であるといえる。

結論では、通俗化によって変化した『事林広記』の「内景図」が視覚イメージとしてどのように役割や価値をもたらしたかという観点においてはまだ掘り下げが足りない印象は否めないが、本論全体の評価に影響を与えるものではなく、研究目的に対する適切な研究方法と充実した研究内容は博士学位論文として十分な成果であるという結論に至った。

以上を踏まえて、全員一致で合格と判断された。

第1章 序論	1
1.1 「内景図」に関する研究の状況と先行研究	2
1.1.1 道教分野	3
1.1.2 医学分野	4
1.1.3 他の関連する分野	5
1.1.4 「内景図」をめぐる印刷文化についての研究の状況	5
1.2 問題意識と研究理路	6
1.2.1 問題意識	7
1.2.2 研究理路	7
1.3 各章の位置づけ	8
第2章 「内景図」の造形背景	10
はじめに	11
2.1 内景の語源	11
2.1.1 哲学的な意味	11
2.1.2 宗教的な意味	13
2.2 「内景図」の源流	17
2.2.1 内景理論の視覚化	17
2.2.2 宗教的性質図像と医学的性質図像の発展	23
2.2.3 その他の支流的な図式	29
2.3 印刷物における「内景図」の版式について	30
2.3.1 「内景図」に関する印刷背景の概括	30
2.3.2 「内景図」の主な図文の版式	32
まとめに	35
第3章 『事林広記』に掲載された「内景図」の版本	37
はじめに	38
3.1 『事林広記』の印刷背景	39
3.1.1 日用類書の定義	39
3.1.2 『事林広記』の性格	42
3.1.3 『事林広記』における挿絵の特徴	46
3.2 『事林広記』の現存する刻本の書誌	47
まとめに	55

第4章 『事林広記』の「内景図」における視覚伝達の分析	56
4.1 諸版本の『事林広記』の「内景図」における文字注釈の比較	61
4.1.1 簡体字と異体字の比較	72
4.1.2 名称の更新	75
4.2 諸版本の『事林広記』の「内景図」における版面と造形の比較	79
4.2.1 寸法の比較	79
4.2.2 造形の更新	84
4.3 上記『事林広記』の4つの版本「内景図」の継承関係	89
4.4 「内景図」の造形的な特徴	91
4.4.1 「煙蘿子内境図」と「八十一難経内境図」の比較	91
4.4.2 諸版本の『事林広記』に掲載されている「内景図」の比較	97
第5章 結論	102
5.1 「内景図」が道教の分野から日用の分野に発展してきた要因	103
5.1.1 学問的背景	103
5.1.2 社会的背景	105
5.1.3 造形的背景	107
5.2 印刷物に掲載された「内景図」における視覚伝達の特徴	109
付録	111
参考文献	111
図の出典	117
古文引用	119